ひみつの白い石

グンネル・リンデ 作　奥田継夫　木村由利子　共訳

DEN VITA STENEN
by Gunnel Linde 1964.
NDC949. 83 284P. 21cm

ひみつの白い石

定 価 1400 円

1982年10月20日　第1刷

訳　者　奥田継夫
　　木村由利子
発行者　坂本起一

印刷・製本　図書印刷株式会社

発行所　合資会社富山房
東京都千代田区神田神保町1の3 郵便番号101
電話 東京(03)291-2171(代)振替東京5-54529

Translated by Tsuguo Okuda & Yuriko Kimura ©
Printed in Japan, 1982.
(落丁・乱丁本はおとりかえいたします)

ISBN 4-572-00449-8

ひみつの白い石

グンネル・リンデ 作

奥田継夫　木村由利子 共訳

DEN VITA STENEN

by Gunnel Linde

Illustrated by Eric Palmquist

Original Swedish language edition published
by Albert Bonniers Förlag AB, Stockholm
Text copyright © 1964 by Gunnel Linde
Illustration copyright © 1964 by Eric Palmquist
Japanese translation rights
arranged with Albert Bonniers Förlag AB, Stockholm
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

もくじ

はじめにちょっと……7
スーパーヒーローの冒険が始まる……23
スーパーヒーローと時計の顔……32
フィデリの最初の試練……48
もののいえない朝……58
もののいえない午後……72
スーパーヒーローの第二の冒険……95
象を散歩に……107
そこでまた、フィデリの第二の試練……117
おなじみの〝ナイチンゲール〟……127
そこでまたまた、スーパーヒーローの第三の冒険……135

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

エプロン魔女とアイロンをかけたワイシャツ……141
判事さんのベッド……152
スーパーヒーロー　対豆の上の判事さん……169
そこで、フィデリの最後の試練が始まる……190
フィデリの宝あつめ……201
次は判事さんとお裁き……218
そこで、靴屋さんの話になる……227
すべては終わりです……237
それでも説明がいります……249
おしまいにちょっと……259
日本の読者へ――グンネル・リンデ……280
訳者あとがき――奥田継夫……282

さし絵　エリック・パルムクビスト
装訂　舟橋菊男

ひみつの白い石

はじめに　ちょっと

これからいろいろなことについて、あれこれと書くつもりですが、だれのなにの物語になっていくかは、自分でもよくわかりません。

わかっているのは、登場人物がフィアという女の子とハンプスという男の子ってことですが、よくある〝少女フィアと少年ハンプスの物語〟にはしたくないなあと思っています。

フィアは黒い髪をひらひらさせている背の低いやせっぽちで、おかあさんはピアノの先生をしています。

およそピアノなんかに縁のない、小さなその町では、ピアノの先生の娘というだけで、子どものあいだではおわらいぐさです。

いってしまえば、フィアのおかあさんは角砂糖をはさむはさみみたいなもの。だって、あんなもの、指があるのに、わざわざ使う必要なんかないじゃありませんか。

でなけりゃ、合わせ鏡の片方みたいなもの。だって、だれがわざわざ首すじなんか見るでしょう。

でなけりゃ、バラの花かざりがついたちっちゃい絹のまくらか、ナイトキャップか、詩の本か、つまようじか、扇みたいなもの。どれもこれも同じくらいばかげたものばかりでしょう。

フィアはともかく、学校では、みんながピアノの先生をそのくらいのものとしか、思っていません。

でも、品物ならかんたんにかくしてしまえます。

たとえば、絹のまくらがおかあさんなら、ベッドのマットレスの下におしこんでしまえばいいし、手鏡なら、たんすのひきだしにしまえばいいし、つまようじだったら、植木ばちにつきさしてしまえば、ことはじゅうぶん。けれども、ピアノの先

生をおかあさんにもったばかりに、フィアはどうすることもできません。

みんなはフィアのことを〝ドレミファフィアのペターソン〟とよんでいました。

「ドレミファフィアは入れたげない。」

石けりをするときでさえ、そういわれました。

「あんたのおかあさんは役たたずだって、判事さんとこのマーリンおばさんがいってたわ。」

おさげのブリッタがいうたびに、フィアは精いっぱい、いいかえします。

「別のおかあさんなんか、ほしくないもん。」

じつをいえば、それもほんとうのことでした。

フィアは、おかあさんが判事さんと結婚しているか、食料品のお店へつとめているかのどちらかだったらいいのに、と思っていました。子どもが買いにいくと、キャンディーのひとつもくれる、やさしいおばさん。そうしたら、石けりの仲間にも入れてもらえるでしょう。

「早く帰って、ドレミファでもお弾きあそばせ。お上品なフィアちゃん。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ブリッタがからかいます。
みんなはわらいます。
「意地悪されても、聞こえないふりをすること。平気な顔してて、おかえしをいわないこと。そうすれば、あきらめてしまうわ。」
おかあさんはなぐさめましたが、ブリッタのいる学校ではききめがありません。判事さんの家の家政婦、マーリンおばさんにもつうじません。
おばさんはフィアが判事さんの持ちものをこわしたとか、仕事のじゃまをしたとか、階段の手すりについているかざりをとってしまったとかいって、四六時ちゅうおかあさんをいじめていました。
フィア一家は判事さんの家に間借りをしています。判事さんの家はその面積だけで目を見はりますが、美しい門と生け垣にかこまれ、庭のあちらこちらには、りっぱな木が植えてありました。
中の小さい木が、マーリンおばさんが美容院ですわっている姿ににているので、フィアは一度、おばさんのエプロンを持ちだして着せたことがありました。

「おばさんはおこらせないのが、いちばん。」

おかあさんが心配したので、おこらせる前に、はずしてしまいました。

芝生の上を歩くのは禁止。庭の小道もほうきの目が新しいときは、だめ。ほうき目はたいていついています！　壁にボールをぶつけてあそぶなど、禁止も禁止。

ただ、門のこちら側にたたずんで通りをのぞくこと、これならできます。意地悪する子どもはいないし、へまをしても、ガミガミいうどこかのおばさんもめったにあらわれません。

ときどき、フィアは考えます。もうちょっと大きくて、強かったら、ブリッタのおさげを精いっぱいひっぱってやるのにとか、でなきゃ、クラスのだれよりもきれいだったらとか。

でも、そんなこと、あるはずがないじゃありませんか?!

フィアはまた鏡を見るたびに、間のぬけた顔だと思い、こぶしで鼻柱をたたきたくなります。

そういうわけで、いつも門のそばから外をながめていましたが、フィアのそんな

ようすだけを書いても、一さつの本にはなりませんよね。

では、次にうつります。

＊

といっても、男の子のハンプスについてあれこれと書いて、一さつの本をつくるつもりにもなっていません。

ハンプスはがらの大きな子どもではありませんが、フィアより背は高めで、新しくひっこしてきた靴屋さんの家に住んでいます。

靴屋のおじさんはヒゲはぼうぼう、親指は一本なくし、ぜんぜん新しくないくせに、どの土地に行っても、新しい靴屋さんとよばれていました。

だって、半年ごとにひっこすので、だれともおなじみにはなれませんから。

靴屋さんには六人の子どもがあって、その上に、ハンプスをかかえていました。

親なしっ子のハンプスはおいにあたります。

今までに、エスレウ、エーデスヘグ、ノルディング、ユッタボーダなど、あちこちの土地に行きました。

天井にしみのある古ぼけた別荘に住んだこともあります。夜になると、ネズミが出てきて、ごみ箱の中をあらしまわるあばら屋に住んだこともあります。

どこに住んでも、すぐひっこします。

おかみさんが、今いる場所のことで不平をこぼすと、おじさんは、

「住みたくて住んでいるんじゃないんだ。ぶつくさいうなら、ひっこししちゃうぞ。」

といって、またひっこします。

といっても、ハンプスは前に住んでいた所へもどりたいなどと、一度も考えたことがありません。

それというのも、ひっこす前には必ずといっていいほど、なにかやっかいなことをしでかしていましたから。

ある土地では、牧師館の子どもの帽子を残らず木の上にほうりあげてしまいました。帽子は三つで、赤いのと緑のと毛の房がついたのでした。房のついた帽子はとうとう枝にひっかかったままになりました。

別の土地では、温室の上でスケートのまねごとをして、ガラスをふみぬきました。
また別の土地では、ニシンのあみにからまったバカネコを助けてやろうと思ったばっかりに、あみはずたずたになりました。
ほかにもなにがおこったか、それはいわぬが花というものです。
「わざとやってるみたい。しまいに、天使さまがお泣きになるよ。」
おかみさんの小言にハンプスはつめたく、
「泣き虫の天使なんか知ったことかい。」
といいかえします。
ハンプスがワルだってことは神様もごぞんじで、ひっこすごとに、いざこざにまきこまれることになっています。
ひっこしからひっこしまでの短いあいだに、その町の子どもたちに自分が強いことを見せようとすれば、急ぐが勝ち。
やっとのことで、子どもたちの尊敬を勝ちえたころには、親がわりの靴屋さんはひっこします。ハンプスはふたたび、げんこつをつばでしめして、次の土地で最初

から始めなければなりません。

そのほかにも、ハンプスにはカッコよく見せようとするところがありました。たとえば、算数に良い成績をとってみせようとか、表玄関の小石をぜんぶなげすててみせようとか。こういうことは、どれもこれもうまくいったためしがありませんが。

こんなことばかりお話しても、たいくつでしょう。

そこで、ハンプスについてはこれくらいにしておいて、ハンプスがフィアの住んでいる小さい町にやってきた日のことからお話しましょう。

*

それは美しい夏の一日でした。

日の光が梢という梢をかがやかせ、家の白い壁という壁の前には、かげろうが立ちのぼっていました。

夏休みも終わりに近くなって、あと、一週間で新しい学年が始まります。

判事さんの門の内側で、フィアはいつものように、街路樹をながめていました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com